

紀曆。

トヒヨウウン 土肥養雲 天正十三年初めて前田利家に仕へて八百俵を領した。その子庄兵衛の時武藤氏を稱し、五代庄兵衛知周に至つて再び土肥氏に復した。

ドヒラヤマ 土平山 ヤマドヘラ 鳳至郡谷内の部落から東方に在る山。高さ圖上測定三二〇米。地質輝石安山岩。

トブタケ 藪武 加賀藩村井氏の家臣で、餘技として刀劍を鍛へた。田向氏。加州佐藤原義武と切る。嘉永頃の人。

トブロ 飛櫓 白山禪頂私記に、泰澄が啓王山の巖窟に苦行した時、出羽國の米船が海上を通過したので、鉢を飛ばして供養を請うたが、船頭神部の淨定は之を拒んだ。是に於いて船中の俵米・櫓楳盡く島の如く飛んで啓王山のあたりに着いた。今その在所を俵・飛櫓と名づけるとある。これは元享釋書に泰澄が白山で爲したとあることを啓王山に附會したもので、俵は河北郡俵等村、飛櫓は同郡戸室山をさすのである。天文日記八年十二月四日に加州飛櫓金泉坊とある金泉坊も戸室の山麓にあつた寺院であらう。

トブゴゲン 飛櫓權現 金澤野町千手院の寺記に、飛櫓權現本地薬師・觀音・不動・愛宕・白山權現を勧請するとある。千手院はもと白山宮の衆徒で、河北郡井家庄領家方福久村兼遠の氏寺であつたから、同郡戸室の山靈を祀つたものである。飛櫓權現は戸室權現に同じい。

トベチテイ 戸部知底 鹿島郡徳丸の人。通稱彦左衛門。字は子直。空齋又は吾平と號し、俳名を大乙と言ふた。母の死後京に出て

皆川洪園の子篁齋等と交り、歸郷の後子弟に教授したが、文化十四年その還曆に當り、門人等相謀つて壽碑を能登比咩神社の祠畔に建てた。論語講本・易原解の著がある。

トベリツドウ 戸部栗堂 鹿島郡能登部下の人。通稱名次兵衛。號は栗堂。幼にして學を好み、長じて風雅を解し、俳諧を蒼虬に學んで門弟が多かつた。天保十三年九月五十八歳を以て歿。その子も亦名次兵衛と稱し、左右と號して俳諧を好んだ。

トボキ 戸保木 河北郡宮野内の小字。

トボシ 灯 羽咋郡釋造庄に屬する部落。

トホシマヤマ 遠島山 鳳至郡棚木の東南に在る海角。

トホシマヤマジヨウ 遠島山城 ↓タナキジヨウ 棚木城。

トホダシゲカズ 遠田重貞 通稱勘右衛門。祖父重次の遺知二百五十石を受け、後更に百石を加へて三百五十石を領し、大小將・前田吉徳御抱守等を経、正徳三年致仕して不門と號し、料二十人扶持を受けた。享保三年三月廿二日歿、享年八十五。

トホダシゲツグ 遠田重次 通稱勘右衛門。前田利家に仕へて二百五十石を受け、大坂の後役に三、丸昇際で敵一人を討取つた。その歿年を明らかにせぬが、嫡子又右衛門は寛永十五年父に先んじて死んだとある。子孫世々藩に仕へる。

トホダヨリチカ 遠田自遊 通稱三郎太夫。勘右衛門自省的の養子。初め新知三百石を受けて表小將となり、延享四年家督千五十石を襲いで寄合組に列し、寛延三年御歩頭より次第に昇進して定番頭に至り、寛政元年人持組に

列し、二年二月十二日六十五歳を以て歿した。

トホダヨリノブ 遠田自延 通稱松五郎・勘右衛門。父は自久。天保三年家督を受けて千三百五十五石を領し、人持組に列した。

トホダヨリヒサ 遠田自久 通稱九左衛門・誠摩。天明五年新知二百石を受けて大小將となり、表小將に轉じ、寛政二年父三郎太夫自遊の千五十石を相續し、人持組に列し、今石動等支配・公事場奉行・御算用場奉行、公事場奉行(再任)に歴任し、天保三年五月致仕して三百石を受けた。

トホダヨリミ 遠田自省 通稱傳六郎・勘右衛門。初諱重明・重品。父重貞の遺知三百五十石を受け、前田吉徳の御部屋附から、御附大小將番頭・御附御側小將番頭等を経、享保九年二百石を加へ、十二年定番頭に至り、元文五年又五百石を加へて千五十石を領し、人持組に列し、大組頭に任じ、延享四年致仕して焉哉と稱し、料三百石を受けたが、寛政元年歿した。

トホヅカ 遠塚 カツ 河北郡金津庄に屬する部落。もと太郎兵衛塚というたが、元祿十三年七月二十日向後遠塚と稱すべきことを命ぜられた。太郎兵衛塚を太らへ塚と書いたのが、接續して遠の草體になつたのだといふ。

トホリ 通 鹿島郡能登島庄に屬する部落。能登名跡志に、『通村といふは、指出る崎に長者端として、昔長者住みて今に長者屋敷あり。寶を納めし所として、三錢塚など云ふあり。今に礎・石垣などあり。梶の端とも云へるもあり。陸へ近く渡しある故通村と云ふ。高茂の渡しと云ひて瀬風村へ渡る也。』と記する。

トホリガハナ 通ヶ鼻 鳳至郡皆月部落の

北方に在る岬。地圖に通崎とする。

トホリデン 通傳 トリ 珠洲郡内山の内の小字。

トマス 斗升 ↓トノコマス 斗子升。

トマリテ 泊出 珠洲郡馬縹の内の小字。

トマリノマ 泊ノ潤 珠洲郡馬縹の海。寶永元年一覽記に馬縹の大崎から鰐崎までの間をいふとある。

トミコウサイ 富弘齋 金澤の人。書を橘觀齋(初代)に學び、技量遙かに師の上に出て一門戸を張つた。

トミタ 富田 タブ 河北郡井上庄に屬する部落。源平盛衰記壽永二年に『一手は樋口次郎兼光を大将にて三千餘騎、加賀國住人林・富樫を打具して、笠野・富田を打廻り、竹橋を搦手にこそ向ひけれ。』とある。

トミタアキマサ 富田詮正 通稱彌五作。慶長十九年大坂冬役に足輕頭を勤め、翌年の役に岡山口で首一を得、祿千二百石に至つた。後富山藩に仕へて子孫世襲する。

トミタイチジュウロウ 富田市十郎 元和元年大坂再役に従軍し、五月七日二、九町口で討死した。寛永十六年大聖寺侯前田利治の從臣となつた富田五兵衛は、この市十郎の後で、子孫承襲したが、本宗は遂に斷絶した。

トミタエモン 富田右衛門 三重記には右衛門佑とも右衛門尉ともする。下總直吉の子。竹園雜記にいふ。富田下總は八千石餘の祿であつたが、右衛門は與力知共一萬石を領し、その富山侯前田利次に隸せしめられた時、八千石を嫡子圖書に譲り、二千石を致仕料とした。右衛門は富山に赴くを欲しなかつた爲この命を得たのである。富山では圖書の養子繼